□ 各地の音楽活動
● 北海道

八　木　幸　三

札幌交響楽団(札響)の定期演奏会では，コロナ禍の影響が減少し，開演前のロビーコンサートも復活した。首席指揮者M・バーメルトは２月定期で，22年度年間テーマ「水」にちなんだ武満徹「雨ぞふる」を演奏。５月定期ではウクライナの悲劇に思いを馳せながら，ブラームスの「ドイツ・レクイエム」を敬虔な祈りを込めて聴衆に届け，９月定期ではバーメルトらしい作為性のまったく無い，ごく自然な流れでフランクの交響曲を演奏した。名誉音楽監督尾高忠明は３月定期で，エルガーの序曲「南国にて」を，古戦場をイメージした勇壮さと牧歌的な旋律の対照的描写を通し，英国音楽の権威らしさを披瀝。正指揮者川瀬賢太郎は，自ら勝負曲と言うラフマニノフ／交響曲第２番と23年度年間テーマ「夜」にちなんだムソルグスキー／前奏曲「モスクワ川の夜明け」を演奏した。他の定期での客演指揮者では，３月新定期で鈴木雅明が，恩師でもある矢代秋雄の「交響曲」と，チャイコフスキー／交響曲第６番「悲愴」を聴かせ，８月新定期では息子の鈴木優人が，プーランク／フランス組曲をチェンバロとの弾き振りで，ルネッサンス期の悠久さと現代的な楽器の扱いを優雅に聴かせた。大植英次が糀場富美子の「広島レクイエム」を平和の願を込めて演奏し，４年ぶりの登場となったH・ホリガーは自作も含め，バルトークを中心とする曲目で緻密な指揮をみせた。今年最も話題となったのが，札幌出身の反田恭平が札響と初共演した６月定期。早々にチケットが完売する人気に違わず，ラフマニノフ／ピアノ協奏曲第３番を怜悧なピアニズムで表現。友情指揮者広上淳一が，うねるような音の波を扇情的に生みだし，両者が作曲者の郷愁とロマン性を壮麗に表出させた。他のゲストとしては，昨年のPMFで鮮烈な印象を残した金川真弓を迎えてのプロコフィエフ／ヴァイオリン協奏曲第１番，コロナ禍で出演が２回延期されていたO・ムストネンが覇気のある打鍵でプロコフィエフ／ピアノ協奏曲第３番，さらにG・オピッツのブラームス／ピアノ協奏曲第２番が深く印象に残った。

パシフィック・ミュージック・フェスティバル(PMF)は，超大物指揮者や人気アーティストが話題をつくることは無かったものの，勢いのある若手指揮者やゲストアーティスト，さらには従来通りのベテラン教授陣が顔をそろえ，世界22カ国・地域から74人のアカデミー生が参加する密度の濃い教育音楽祭となった。会期前半のPMFオーケストラ(PMFO)演奏会には，41歳の指揮者K.・ウルバンスキがショスタコーヴィチ／交響曲第5番を豪快にドライブ。この曲では，ウィーン・フィルやベルリン・フィルのPMF教授陣も加わり，コンマスを務めたR・キュッヒルなど名匠たちの独奏が堪能できたと同時に，短期間でのリハーサルにもかかわらず精緻なアンサンブルを作り上げるアカデミー生の質の高さも感じた。さらにカナダ出身28歳のピアニスト，J・リシエツキを迎えてのグリーグ／ピアノ協奏曲は，彼の長身を生かした力強い打鍵と，極めて繊細なピアニズムで，オケと一体になりながら北欧のロマンを表出させた。PMF教授陣による３つの室内楽演奏会では，まずPMFベルリンがいつもながらの多彩な曲目。ウィーン・フィル楽団長D・フロシャウアーをはじめとするPMFウィーンは，躍動感のあるボーイングで熱演。米国主要オーケストラ団員の教授陣によるPMFアメリカは，プーランク／六重奏曲などを高度な技巧で届けた。PMFの総決算ともいえるGALAコンサートは，初登場となるT・ダウスゴーが，未完だったブルックナー／交響曲第９番を補筆完成版全4楽章でPMFOを牽引。ダウスゴーは両翼配置で劇的な起伏を何度も作り上げ，80分に及ぶ大曲を暗譜で指揮。注目の第４楽章は慄然とした旋律の掛け合いから，恒久平和を祈願するかのような終結部が見事だった。さらに俊英ヴァイオリニスト金川真弓を迎えての「メンコン」も抒情性に富んだ演奏が聴けた。

札幌文化芸術劇場(hitaru)は，２月に初のオペラプロジェクトとして地元出演者による「フィガロの結婚」を全幕ノーカットで二日間ダブルキャスト公演した。演出の三浦安浩は，原作のフランス革命前夜からロシア革命前夜に時代設定を移し，場所も冬の北国。初日は倉岡陽都美(伯爵夫人)が豊饒な声の響きで白眉。岡元敦司(伯爵)も洒脱な演技で健闘。２日目は，石岡幸恵(伯爵夫人)が安定した歌唱・演技力で佳演。６月には同じくhitaru主催による「サロメ」が上演され，東京二期会をはじめとする出演者は，本道出身の大塚博章，金子慧一，大久保光哉なども堅実に役柄をこなしていた。特に終始豊かに降りそそがれた札響による音のシャワーは，R・シュトラウスの円熟味を極めたオーケストレーションを遺憾なく発揮し，密度の濃い音楽が展開された。さらに10月には開館５周年事業として東京二期会オペラによる「ドン・カルロ」を全５幕版で上演。終始白と黒を基調とした舞台で，登場人物たちの望みが叶えられない苦悩と絶望を深遠に表現。演出のL・デ・ベアは，近未来を思わせる舞台設定で男女関係を鮮明に描き，キャストの性格を斬新に表出させた。地元オペラ団体では，オフィスリベリュール(奥出かおり代表)が「トスカ」全３幕を室内楽専用ホールで簡素な伴奏ながら，映像などを駆使し，グランドオペラ並みの面白さで届けた。札幌室内歌劇場は「登場人物はほんの数人，舞台は小さな時計台ホール，短い時間にあふれる感動」をスタンスに「手のひらオペラ」シリーズをおこなった。６月に歌劇「モーツァルトとサリエリ」，11月には日本語とイタリア語の二段構えで，歌劇「ザネット」を２回にわけて公演する画期的な試みをおこなった。

コロナ禍の影響が薄れ，リサイタルや室内楽コンサートの開催が複数重なる日も多数あるほど増大した。ピアノではベテラン岡本孝慈が，自身の研究テーマであるレーガー作品をクラリネットの河野泰幸とメゾ・ソプラノの伊藤真由美と組んで２回にわたり「レーガーの夕べ」を開催。浅井智子はベートーヴェンからラヴェルまで，若手ピアニストでは石原優香がバッハから現代音楽までの多彩な曲目でそれぞれリサイタルを開いた。名取百合子をはじめとする７人のピアニストによる「Piano Duo Concert」は24回目を迎え７曲の２台のピアノのための作品が聴けた。声楽では谷地聡子，村中朋見，平野則子，中田友紀が，それぞれ自身の得意とするオペラ・アリアやイタリア歌曲，フランス歌曲，ドイツ歌曲，日本歌曲で特色あるリサイタルをおこなった。秀逸なオペラ出演やソロ・コンサートで活躍した三輪主恭が道銀芸術文化奨励賞を受賞した。器楽では「新進演奏家育成プロジェクトリサイタル・シリーズ」で高畑友香が作曲家晩年のクラリネット作品などを聴かせ，阿部博光と妻佳子との「フルート＆ピアノ結成40周年記念デュオリサイタル」で名曲が綴られた。長岡聡季はピアニスト丸山滋と共に20世紀のヴァイオリンソナタを集めたリサイタルを，ハープの武川奈穂子はダマーズの室内楽作品を聴かせた。

海外との交流コンサートも盛んになり，札幌音楽家協議会と北海道国際音楽交流協会が共催でハンガリーからピアニスト，チェリストの２名を迎え，地元アーティスト12名との交流コンサートを，札幌・リトアニア文化交流コンサート実行委員会は，リトアニアのオペラ歌手V・ミシュクナイテを迎え，札響団員やピアニスト新堀聡子らとリトアニアの作曲家作品などを共演した。札幌市と姉妹都市である韓国テジョン広域市から室内楽団と女声合唱団を招き，地元アーティスト５名と両国の作品を演奏。年末にはウクライナ国立フィルハーモニー交響楽団が，札幌新アカデミー合唱団とベートーヴェンの「第９」を共演。ロシア侵攻が続く中，平和を希求する響きがホールを満たした。